五、 Q_1 型の振幅大なるものから Q_2 型が續いて起る傾向がある。そして規則脈動には通常著るしく唸りを伴ふ。

六、氣象要素との相關は次の様である。

- (i) 一般に氣象要素に對し脈動の方が相が遅れる様な傾向がある。
- (ii) 風速大の時は振幅も大であるが少しの例外がある。
- (iii) 氣壓變化との相關は見付からないが、脈動の著るしく大きい時は氣壓が早く上昇する時である。
- (iv) 氣壓の絶對値と週期とは可成平行する。

七、振幅と週期とは比例をしない、寧ろ大體に於いて逆の方に近い。

八、固有振動 Q_1 型は Q_2 型と倍音と見られる。

九、定常波の考へに依つて、東京では深さ一軒半ばかりの所に不連續層が考へられる。即ち地表面に柔かい地層が假定される。

十、 Q_1 型は上下自由な、 Q_2 型は上が自由で下が固定された定常波として説明し得る。

終りに、この論文を草するに當り、寺田先生に色々御教示に預つた事を感謝する次第である。(一九二六年三月中央氣象臺に於て)

大正十五年一月力行會登山隊

雪中富士登山記

沖 野 喜 次

An Experience of Climbing up Fujiyama in January.

By Yositsugu OKINO.

一行八人御殿場驛に着いたのは一月十日午後零時二十分である。天朗らかに氣澄める田舎の風光に運ぶ足取りも軽く一隊が馬返しを経て太郎坊に着したるは同日午後六時であつた。時に寒暖計は攝氏四度である。今日は實に静かな暖かな日であつた。強力の話によれば今年は稀に見る少雪なりと。そう云はるれば富士の裾野は一面の雪ならんと想像せしに僅かに林間に玉を聯ねた淡雪が敷かれて居るのみ。

いよいよ森林帶を過ぎて二合目に着いたのは同夜七時。寒暖計は零下一度である。斯くして一行は豫定の二合目の室の入口を覗めば中は一面の雪にて満たさ

れ、座するに由なく曳々の懸聲にて漸く一坪程の間雪を掻き出し、爐を造らへて一同協力鳶口をもつて三十分餘の奮闘を續け、雪下より古き戸の壊れたるもの、木片薪の殘散等を採り集め、漸くにして暖を探るの財を得たのである。薪を焚き付くるに及び雪の障壁を以て圍れる室内は一面烟に滿ち苦しさに堪えず。中には外に逃げ出すものあり。されど外には烈々たる寒風『待つて居ました』と許り身に迫り見苦しくも忽ちにして退却して來た。朦々たる煙に咽ぶ一行の辛酸げに悲寥といふもむべなりけりである。強力之言を信じ炭を持參せざりしは一大失策であつた。

一行九名車座になりて暖をとり身體溫るに伴れ渴を覺え、飢を訴ふること頻である。早速用意の餅を取り出し焼きて腹を膨らし「やたら」漬、海苔等の罐詰を空にし罐に一杯雪を山積りとなし雪湯を待ちて渴を醫さんとす。下界を距りて富士の二合目嚙ぞや清鮮の味ひ吾等の腸を満足さすならんと生溫き雪湯をぐつと一口すれば異様の臭氣鼻を衝き舌はざらざら砂に觸る。焚火に透し見れば灰色の垢液混沌として浮び上つてゐる。蓋し噴火口より烈風の吹き散す砂は一面に此の邊にも散布せらるゝを思へば理の當然である。

疲れ切つた一同は毛布にくるまり交る交る火に足を伸し雪を枕に微睡みしも一睡三十分を貪るを得ず忽ち寒さに起き直る。斯くして時計は十一時を報じた。烟は未だ朦々として苦しめて居る。寒氣はいよいよ身にしみ來る。強力の話によれば富士はいつも午後風が出て來るからさうなると極めて危険だと云ふ。一同は午後十一時半各自餅數個、鰯、キャラメル、氷砂糖等を身に付け此處より藁沓に雪止器(かんぢき)を穿き身の防寒具を嚴重にして毛布、食糧の殘部等室に残し、いよいよ出發した。時に零下五度三分であつた。

天を仰げば滿天に見き零れたる無數の星は宛らエメラルドを散せる如く、時々流星長く青緑を曳く邊りの美觀は下界人の到底味ふ能はざるの偉觀である。下方を睥睨すれば所々一團の電光の明滅は遙かの方より吾等一行の此の壯舉を見送るかの如く一隊は譬へん様のなき無心の快哉を叫び續け乍ら登る。十一日午前一時二十分三合目の室に着く。零下七度七分。

此の邊より萬目只皚々乎として一點の遮るものなき眞の雪山に蒐る表面は風の爲に凍り氷の如く硬く一步一步雪止器を踏みしめて登る。勿論夜の事なれども滿天の星光と白き雪路は吾等の行を妨げず。一直線頂上目がけて攀ぢ登る。二時十分四合目の氣溫を計るに三合目の零下七度七分に同じ。

十三州を睥睨せる富岳の嶺頂は曉昏の中にも雄大に崇高に吾等の一隊を待ち侘

びて居るかの如く見へる。一隊が今五合目の室に近づかんとする頃、見よ寶永山の肩の邊より怪しの黒雲現るゝよと見る間に快晴なりし星天さつと曇り、一陣の風捲起すよと思ふ間に小礫の如き雪片は縦横無盡と飛び狂ふ。雪新たに降り來るに非ざれども狂ひし風は滿山の積雪を吹き飛ばし我等の歩行を一層困難ならしむ。午前三時五分偶然辿り着いたのは五合目の石室の屋根であつた。氣溫を計るに氷點下十度三分である。

五合目の屋根に辿り着いた一隊は吹雪を背に氷雪の中に仰臥すれば疲勞と徹夜の不眠とで忽ち睡氣を催す。斯くては凍死の外なしと憩ふこと十分餘にして又もや勇を鼓して頂上目指して登り始めた。凜烈たる烈風は更に劇しく、頭からすつぽり冠れる防寒帽は口鼻を掩ひて呼吸苦しく蔽眼鏡は目を遮りて邪魔になれども散彈の如き雪片に會つては脱する事も能はず。手には三つの手袋をはめたりしも吹込む吹雪に千切れんの思ひ、動もすれば金剛杖持つ手の感覺さへ失はんとす。されど此の杖こそ命の親と強く握りしめる。耳に耳袋をはめ足に藁踏を穿き中に一掴みの唐辛を入れ來りし爲此の二箇所の泣事を聞かざりしは萬金の注意？只安眠不足の爲屢々睡氣の催すには弱りたり。

疲れたる一隊は五間登りては一呼吸し十間進んでは雪中に挫と仆れて休息し、午前四時二十分いよいよ六合目と稱する石室の雪に埋れたる處に辿り着く。烈風は尙歇まんとせず物凄さは愈々加はる。僅か分時の休憩に身は凍らんとす。我等は雪止器の紐の緩みたるなど締め直して更に勇躍して昇る。強力は『私も雪中登山は數回しましたが富士としての天候はこれで今日の如き稀有に見る静さです。此の調子で登れば十時か十一時迄は屹度頂上に着けます。恐らく貴方がたの様に成功したものはないでせう』と、一行は此の言に一層勇氣百倍して齋口を突き立て雪止器を踏み占め踏みしめ登る。この時である 吁ッ ………悲痛な叫びが吾等の鼓膜を劈いた。この瞬間である默々として登り來りし一個の黑影が仰向けざまに打仆れ、金剛杖を握つた儘氷の上をつるつると氷雪二萬尺の富嶽の上より曉昏の暗がり奈落の底まで迄つて行つた。此の凄絶に一隊の足は思はず立ち竦んでしまつた。頂上より吹き下す烈風は一層凄じく荒れ狂ふ。一人の友は今や生死不明である。吾等は今下つて其の安否を搜索せねばならない。然し或は其邊にて支へ止り居るかも知れぬ。夜明けを待つべきかと思へ共十分と立ち居る能はざる此の寒さである。時に強力は『決して下迄迄り落ちる様な事はないと思ひますから、わしが搜して來ます』と云ふ。『では途中で會つて二人で登つて來るなら此の懷中電燈を一つ照し、又佐藤君に登る元氣がないなら室迄歸して君だけ登つて來

て呉れ。若し佐藤君に危険があつたら三つ照して呉れ』と懷中電燈一個を渡し暗號を約して決る。

暫くにして七合目の室影に達したるがこれより上は更に固き固き一面に山を包める鏡の如き氷である。見上ぐれば八合目は手の到るが如く近距離に見へる。されど此の峻峻の斷崖を一直線に昇ることは不可能の事である。一隊は寶永山を斜に六十度位の傾斜を作りつゝ攀ち登る。玲々たる冰山に登る一隊の心細さも頼みとするは手に強く握りしめたる一本の鳶口と足下に穿つ雪止器とのみ。雪止器はその尖端五分許りを氷に突き立て、僅かに身を支へるに過ぎない。その命と頼む雪止器すら巖石の如き硬き氷の爲稍々もすれば弾き返されんとす。未明のことなれば各自の顔色を見知するは難しと雖も只黙々と一語をも發する者なく腰間のぶるぶる慄へ居る有様を見れば血の氣も失せ眞青になつて居るに違ひない。

さるにても佐藤君の生死のほども分明せず強力の電燈の合圖今や今やと三步進みては麓の方を望み五歩登りては振返りすれど更にそれらしき氣配はせず、荒れ狂ふたる烈風は少々静かになりしとは云へ時々思ひ出したるが如く以前より物凄く吹き捲くる。鏡の如き氷上に雪止器を沁らしてははつとし、鳶口を突き損ねては罌丸を上げ、佐藤君の凄慘の狀を思ひ浮べては血の氣もなくして只纔に氷の下より黙々と頭を現す巖角の十間二十間と絶えたる所にあるをせめてもの頼みに後を振り返りては佐藤君の安否を氣遣ひ乍ら攀ち登る。『もう五時半だ強力の言から押せば此の邊は八合目だらうぜ』『おーい おーい』の呼聲もとうに止んで只恐怖と疲労とに驅られて黙々として登り來た一行の中から、休息を要求するが如くに斯う誰かゝ叫んだ頃は、風は全く止み雪も吹き凌はれてか氷雪甚だ尠く、山の生地現れ居ればやれやれと一隊は皆手頃の巖角を見つけて腰を卸す。背に結びつけし寒暖計を取り外し外氣に觸れば氷點下十四度一分である。防寒帽の眉の邊にはさき氷雪が下つて居り途中渴を防がんと鳶口の先にて氷を打ち割りつゝ手にせる爲手袋の表面はセメントで固く塗られた如くに凍りつけり。曉昏未だ明け離れず遙か麓の方を下眼すれば幾千尺の足下は一面の大森林に見えるにあらずや。而も其の手前に横はるは一大溪谷たり。『谷底々々』吁々佐藤君の生死やいかに千仞の谷底へ氷の死體となつて浮び居るにあらずや。谷底へ墜ちずともあの大森林の大木に胴體を打ちて微塵に碎け居るにあらずや。近く君と渡伯せんとする兩親の此の訃報に接せば其思ひや如何、考へるだにぞつとした。一隊は悲痛なる聲を以て『おーい おーい』と下に向つて叫ぶ。瞬間——此の瞬間である——此の叫び下に迄聞へたるにあらざるべきも、曉昏の闇に遙か麓の森林の中より明星の如き電

燈の光り『呬つ暗號がつ』一同は息を凝して見守つた。一…つ、二…つ、『あつ三つだつ』一同は今更乍ら慄然とした。三つは危険の暗號なり。呬々我が友佐藤君は遂に逝いたるか。遙か登り來し方を下瞰すれば薄暗き中天に恰も佐藤君の死を悼むかの如くぼんやりと淡紅の下弦の月が浮いて居る。

一隊は急斜面を殆ど無我夢中で下つた。然り全く夢中で下つたに違ひない。あの恐怖に満ちた一步步全身全靈を投げ込んで登つた鏡の如き冰山をどうして下つたか自分乍ら不思議である。

足下に氣を奪はれ乍ら下つて來る時であつた。東の空見る見る金光射し來り、忽然として猩紅の一點山端に浮び出で、その美觀にはつと初めて我に返つたのである。其の鮮しき光は頂の冰雪を照し螢々と輝き渡り、巨人の爛々たる眼を以て下界の眠りを呼び覺さんとする如くに見ゆ。時に七時である。一行を看返れば三々伍々或者は二三丁後れ或者は十數丁離れて屁つぺり腰に一步步を御丁寧の下り來るを見る。然れども今はさることを眺め居るの時にあらず。一刻も早く友の危険を救はざるべからず。聲を限りに『おーい おーい』と連呼すれども下よりの答は更になし。五間進みては呼び十間來りては呼べども答は依然としてなし。

四合目邊に下りし時なるべし。噎れたる聲にて又もや力一杯『おーい』と呼べば應と微かに聞へる様に思ふ。はてなと思ふ瞬間足の力が弛み突きし齋口が斜に迂りどつと尻餅をつくや『南無三呬つ』と思ふ間もあらず疾風迅雷、閃電の如く余の體は谷底目がけて下へ下へと滑走し出した。

疾風の如く滑走しつゝありし身體は忽ち勿ね飛ばされ或は眞逆さまに或は腹匍ひに止め度もなく滑つて行く。此滑走中余の頭に電の如く灰いたものは八合目にて見し深い々々谷底と森林であつた。死！死！今はこれ以外何の望みもなし。我が友佐藤君も數刻以前には斯くして死を辿りしなり。友の死體に生きて會はんよりは死して彼の世に會はんこそ幸福なれと、殆ど失神せんとするや何物かに『がん』と強く胴體を打たれ其の瞬間『とぶつと軟かき處に身は置かれて止れり。ふいと跳ね起れば風にて吹き集められし軟かき雪の上であつた。

漸く氣を静め吾に返りしが心に掛るは佐藤君の生死の程なり『おーい』と聲を限りに呼べば夢にあらざるか『無事だ一つ』二人の聲が直ぐ下より聞ゆなり。見れば谷底と森林と見しは雪なき山地にして強力と佐藤君の兩人は其處を歩いて居るのであつた。一隊が二合目に無事の顔を御互に見合した時は何れも感謝と歡喜の泪が浮んで居た。先刻の危険の暗號は強力の間違ひであつた。午後二時御殿場に恙なく歸着し三時十五分の東京行の汽車に乗じて一行八名無事歸京した。

雪中登山心得 本文の吾等の経験にて略知り得べきも左に二三を追録すれば。

- 1 風雪激甚ならざれば寒中登山は左程困難にあらず。
- 2 登山者は少くも二三合目迄前目登りて一泊し翌朝午前中に頂上を極むること。
- 3 食料は餅(固くなれば砂糖を入れて搗いたもの可)カステラ類の凍らざるもの、氷砂糖等。
- 4 飲料水は魔法瓶等に入れ持参すること。
- 5 防寒具は防寒帽、耳掩ひ、毛の靴下、藁靴、手袋、(皮、毛等三枚位)毛布一枚 チツキ、ジャケット等。
- 6 雪止器、鳶口は忘るべからず。
- 7 室造は炭二俵位持参すべし。

観測気温表 携へたる寒暖計はアルコール寒暖計にて歸京後中央氣象臺の検定を受けたり。気温とあるは読み取りにして更正とあるは器差を加へて更正したる値なり。

場 所	時 刻	気温 ($^{\circ}\text{C}$)	同更正値 ($^{\circ}\text{C}$)	場 所	時 刻	気温 ($^{\circ}\text{C}$)	同更正値 ($^{\circ}\text{C}$)
一里塚	十日 4 ^h .pm.	5.8	6.4	三合目	十一日 1 ^h .20 ^m .am.	-8.0	-7.7
馬返し	同 4 ^h .40 ^m .pm.	6.0	6.6	四合目	同 2 ^h .10 ^m .am.	-8.0	-7.7
太郎坊	同 6 ^h .pm.	4.0	4.5	五合目	同 3 ^h .05 ^m .am.	-10.0	-10.6
二合目	同 6 ^h .45 ^m .pm.	-1.0	1.4	六合目	同 4 ^h .20 ^m .am.	-12.0	-11.8
同	同 11 ^h .30 ^m .pm.	-5.8	-5.3	八合目附近	同 5 ^h .50 ^m .am.	-14.3	-14.1

以上

雜 錄 Miscellaneous.

大正十四年十二月下旬奥羽北海道西部の颶風襲來による最低氣壓の観測 昨年十二月下旬奥羽北海道の各地は一颶風の通過により猛烈なる風雪の害を被り損害高も頗る多額に上れり。又函館以東の海岸には海嘯起り、奥羽北部北海道西部には未曾有の最低氣壓を測れり。今この颶風の發現より本邦附近を通過の状況を見るに、十二月十八日頃滿洲里附近に發生し東南東の進路をとり「オホツク」海に入る小低氣壓ありたり。當時この颶風は一不連續線を伴ひ、その南西端は沖繩島の北西海上に迄達し、二十日午前遂に同洋上に小低氣壓を形成するに至れり。漸次發達しつゝ九州中國を過ぎり隱岐島の東方に出で秋田の北西二百餘浬の沖合を経て二十二日早朝津輕海峽の西方を北上し、小樽沖より進路を東にとり北海道を横斷し國後島の南方を経て翌日早朝には擇捉島の北方にあり「カムチャツカ」方面